

者・初演年不詳

春更はるふけて江戸えどの淡路あはぢの上総山かづさやま、洲崎すききにかよふ浜千鳥はまちどり、幾夜寐覚いくよねぞめの関せきもなく、今は身いまで身みをうらむらさきの、袂つまにかしくを反古染はごぞめに、覚悟かくごも対たいの晴小袖はれせこ

蝶花てふはなの外ほかを吹雪ふぶくの二人連ふたりづれ、狂くるふともなくほらほらと風かぜに押おけて踏所ふみどころなき、足弱車あしよわるまのりなや引悩ひきむ、おそのを抱だきいたはりて、脊撫せなでさすり声曇こゑくもり

世よの成行なりゆきとは言い乍なら、長ながの病氣びやうきの其上そのうへに、苦勞くらうのありたけ仕尽しつくして、情なげと義理ぎりに身みを捨すつる、不憫ふびんの者ものやと抱締だしめれば、顔かはつれづれと打守うちまもりアレまた什麼なん勿体もちない事こと言いしやんす、大切たいせつな宝たからを失うひ、御浪人ごらうにんにした元もとはと言いば私故わたくしご、今更言いまさらも愚痴いみじなれど、誓ちかひは二世にせと三世相さんせさう、あけて数かずへて相性あひしやうに、金きんと水みづとは上うへもない、よい子儲こくらけていつ迄までも、中睦なかむつましう栄さかへると、書かて有あるは真実しんじつの、本ほんと思おもふた甲斐かひもなう

アノ兄にいさんの胸慾どうよく故ゆゑ、子こは儲まへけても情無なげい呵責かやくの責せめの墮胎藥おろしくすり、日ひの目めも見みせず其上そのうへに、いくせの思おもひで育そだてたる

おまつも非業ひごふに先立さきだちて、お前まへへ何なんと言い訳わけなく、口惜くちをしと思おもふ一心いつしんに

兄あにを殺ころした身みの罪科ざいこ、親おや子兄弟夫婦きやうだいふうふまで、一夜いちやのうちに死しるといふ、斯麼因果こんないんぐゑがあるものぞと、男おとこの膝ひざにすがりつき、前後正体泣泣ぜんしやうたいなきづむ

六三ろくさんは心励こころほげまして

是これはしたり二人長ふたりながらへ居ゐるならば、その歎なげきもさる事こと乍なら、娘むすめにも長庵ちやうあんにも、死しばあの世よでまた遇あはれる、今端いまはの際きはに其様そのやうな、愚痴ぐちを言いものではない、人ひとは最期さいごの一念いちねんによつて生しやうを引ひくと言いへば、心こころを清きようもつて死しるものぢやわいのう

ほんに爾さうでござんす、おまつを先立さきだてて跡あとに心残こころのこりはなけれど、旦那さん御夫婦ごふうふに御恩ごおんもおくらず

ハテそれが矢張迷やはりまひの種たね、もうもう思切おもひきつてアレ見みやいの此このマア土堤どてからが袖そでが浦うら、見晴みはす夜半よはの春景はるげしき色

月は冴さえれど晴間はれまなく、涙なみだに雨あめのかき曇くもり

袖そでの雫しづくを後のちの世よの、手向たむけの水みづと花見月はなみづき

十八日じふはちにちを命日めいじちに、なるとも知らず堰せかれて後のち

逢あたも丁度ちやうどあとの月つき

数かずへて見みれば

おなおなひ

同じ日おなじひに

送りおくりの船ふねの三味線さんまいせんも、何処どこへ佃つくだのうはの空そら、心矢走こころやばせにそれからさきは、文ふみで知しせて松本まつもとへ、互たがひに焦こがれよるとなく、屋ゐるも洲崎すききで青嵐あをあし、一寸いちゆひぞりて三井さんみならぬ、八幡鐘やわたかねの別路べつろに、まめでといふを汐浜しほはまの、涙なみだと共に落おつ雁かり、富士ふじの暮雪ぼせつに夕照ゆふてらす、野木場のきばの月つきの影清かげきよく、今いまぞ

後生ごしやうの雲晴うみはれて、既すでに成仏じやうぶつと立留たちどまり

病上やまがりのそなたを歩あませ、何処どこまで往ゆいたとて爰こゝぞ人ひとの死所ししよと定さだまつた場所ばしょもないもの

其上そのうへわたしに兄にいさんを殺ころした科か、縄目なめに掛からぬその先さきに、早はやう死したう御座ござんすが、此このマア自墮落じだらくな態なり、一寸帶ちよつとを締直しめなほすまで待まつて下くださんせ

と死しぬ今端いまはに前後ぜんご、所体しよたい繕しならう心根こころねは、夫そとに見みする女氣をんなぎの、哀あはれさいとど枉木垣まきがき、もれて念仏ねんぶつの声幽こゑかすか

南無阿弥陀なむあみだなむあみだ

ヲヲ幸さいはひアリや靈岸寺れいがんじの常念仏じやうねんぶつ、声こゑを知辺しるべに

死出しでの山路やまぢへ

手てに手てを取りとて

エ嬉うれしう御座ござんす

南無阿弥陀なむあみだなむあみだ

心静こころしづかに支度しだくしや

アイもうし此扱帶このしきで足あしを確しかりといはへて下くださんせ

ほんに乱みださぬやうにわしが斯かうして、ヲヲこれはしたり強つよう痛いたむであらうのう

なんのマア今死いましぬる身みに厭いとひはない、六三ろくさん今一度いまいちど顔かほを見みせて下くださんせいナア

南無阿弥陀なむあみだなむあみだ

覚悟かくごはよいかと

此世このよの念あけも明近めいぢき、女夫めをとの命短夜いのちみじかなよや、今いまぞ最さい後ごと引寄ひきよせて、泣顔残なきがほのこすな残のこさじと、笑顔ゑがほつくれど手ても慄ふるひ、刃やいばの立たてどもなく涙なみだ

ココ此胸このむね二元ふたえを

ヲヲせきやるなせきやるな

イエイエ早はやう

と女をんながいさめを力草ちからぐさ、風誘かぜそひ来る題目だいもくも、われをすすむる妙法めうほふの、利剣りけんとぐつと貫つらぬけば、七転八倒しちてんぱつたうこはいかに、切先喉きつさきのどの笛ふえをよけ、

死しもやらざる最期さいごの業苦ごうく、共に乱みだれて苦くるしみの、氣きを取直とりなほし引寄ひきよせて、われと我身わがみに貫つらぬきたて、扶えぐる苦くるしさ暁天げうてんの一声ひとこゑ死出しでの田長鳥たをさどり、

冥途めいどの空そらへと行迷ゆめふ